

「戦争と平和！」

第 11 回

沖縄のアブチラガマ

当麻 実

とうとう戦争中の話を聞かないまま…

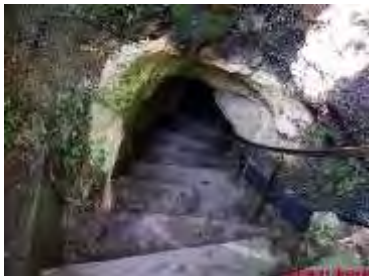
2019 年 2 月 24 日、沖縄県の辺野古新基地建設に伴う埋め立ての賛否を問う県民投票で反対票が 72%を超えた。それでも連日、大量の土砂が米軍キャンプ・シュワブ沿岸部に投入されている。安倍首相は「投票結果は真摯に受け止める」といいながら、民意を無視して工事続行。首相のむなしい言葉が響く。

私が幼い頃、父はカーキ色の国民服をいつも着ていた。明治生まれの両親からとうとう戦争中の話を聞かないままに終わってしまった。親から子への伝承がないまま時が過ぎてしまった。いまから思うととても残念だ。私が戦争と平和を考えはじめたのは二十代に入ってからだ。

かつて私は歴史の事実を直視しようと、植民地支配下の朝鮮、侵略された中国でなにが行われたかなど、その戦跡を訪ね、生き証人の話を取材したことがある。たとえば 1932 年の平頂山事件。日本軍によって、中国・撫順炭鉱近くの村人が大量虐殺されて、何百という遺骨がそのまま保存陳列されている記念館。

暗闇の凹凸のガンマで何が起きたのか？

2004 年秋、私はひさしぶりに沖縄を訪ねた。そ



沖縄のアブチラガマ

こで忘れられないガンマ（自然洞窟）での体験をした。場所は、沖縄南部の玉城村（現・南城市玉城）にある糸数アブチラガマに入ったときである。

現地の人にこのガンマを案内された。懐中電灯をたよりに曲がりくねった凹凸の激しい壕内で戦争中何が起きたのか、暗闇のなかで説明を受けた後、「一分間黙とうして下さい」といわれた。その瞬間、阿鼻叫喚が頭のなかをよぎり、真っ暗闇のシーンとする静かな凹凸の地で、天地がわからないまま立っているかのような錯覚に陥った。この暗闇のじめじめした自然壕のなかで沖縄守備隊や住民が想像を超える悲惨な体験をしたのかと思うと胸が痛む。

沖縄にはガンマとか壕といわれる自然洞窟がいた

るところにある。この玉城にあるアブチラガマ（糸数壕）でも、沖縄戦の悲劇が起きた。1945 年 4 月、米軍は沖縄中部の西海岸に上陸。数カ月にもわたって日米の地上戦がくり広げられ、二十数万人が命を落とした。

このアブチラガマには米軍が上陸する直前、洞窟陣地として木造の兵舎等が建設され、壕内に慰安婦が 5、6 人いたという。暗闇の洞窟内に慰安所があったと聞き、人間の性のすさまじさを感じた。

米軍上陸によって戦局の悪化、このガンマは南風原陸軍病院の糸数分院として使用されるようになった。16 歳以上の女子生徒が戦場に動員された「ひめゆりの悲劇」は有名だ。この洞窟病院にも、十数人のひめゆり学徒看護隊が送られた。つぎつぎとガンマに運ばれる傷病兵、この暗闇の洞窟内は阿鼻叫喚の世界といえよう。

かたく口を閉ざして亡くなった体験者

このガンマには数百人から千人近くの傷病兵が収容されていた。麻酔なしの手足の切断をとっても、「痛い！ ヤメロ、ヤメロ！ 殺せ、殺せ！」という声が響きわたったに違いない。切断した手足や死体を運ぶのも看護隊の仕事だ。戦局はますます激しくなり、5 月下旬にはこの糸数分院は撤退した。だが、見捨てられた重症患者には青酸カリが渡され、まだ多数の避難民も壕内にいた。6 月になると米軍はアブチラガマを大砲、黄燐弾を使い総攻撃、壕内の悲劇はさらにつづいた。アブチラガマに親戚が投降を呼びかけても「スパイ」とみなされ、暗闇の壕内から発砲され、亡くなった村民もいるという。

自然壕の糸数アブチラガマは小さな入口だが、全長 270m、奥に入ると高さは十数 m もある。このなかで多数の傷病兵、避難住民などが攻撃にさらされ、恐怖におののき、ギリギリの極限状況に追いこまれた。

戦争は人々の心になにを残したのだろうか。戦争中の惨禍を「思い出したくない」と、かたく口を閉ざして亡くなった体験者は多いという。それだけ戦争は人々の心を痛めつけた。だが、勇気をもって後世のために体験を話す人もいる。暗闇のアブチラガマに入って、戦争の悲惨、平和の尊さをあらためて実感させられた。